

# 冷たい美人医師が、跪いた瞬間

## 第一章「続ける」

四方を白い壁に囲まれた診察室は、昼の光が静かに差し込んでいた。入口には簡素な問診机が置かれ、青いパーテーション一枚で空間が仕切られている。机の上ではパソコンが起動したままになっており、いくつかのカルテが無造作に積み重ねられていた。

1

「失礼します……」遠慮がちに顔を覗かせながら、一人の患者が診察室へと足を踏み入れた。「先生、いらっしゃいますか？」

返事はなかった。だが、静まり返った診察室の奥、パーテーションの向こうから、かすかに衣擦れの音が聞こえ始めた。

薄布のようなパーテーションを透かして、昼の陽光が診察室の床に柔らかく落ちていた。その光の向こう、患者の目

には誰かの影がはっきりと映っていた。

影の正体を確かめるように、患者は数歩前へと足を進めた。そして再び呼びかけた。「張先生？」

「……何のご用ですか？」

患者がパーテーションの奥へ回り込もうとした瞬間だった。ナース服を着た男が上半身だけを乗り出し、手を差し出して行く手を遮った。

患者は一瞬きよとした様子で、手にしていた受付票を掲げた。「張先生、いらっしゃいますか？診察の予約があるんですが……」

看護師は受付票を受け取り、ちらつと目を通すと無表情に言った。

「張先生は診察中です。お名前が呼ばれるまで、外の待合でお待ちください。」

患者は小さくうなずき、静かに背を向けて診察室の出口へと歩き出した。

ドアに手をかけたそのとき、背後から看護師が無造作に言った。「ドア、閉めて。」

青いパーテーションの奥には、簡素な診察ベッドがひとつ置かれていた。だが、その上には誰の姿も見えなかった。診察ベッドの下には、白衣を肩からまとっただけの人物がひざまずいていた。肌は一糸まわず、薄紅色の唇はわずかに開き、胸は大きく波を打っていた。

——どうやら、先ほどの不意の訪問に、少なからず動揺していたらしい。

患者を追い返すと、看護師はふたたび踵を返し、数歩の足取りで診察ベッドの端へと戻って腰を下ろした。

ひざまずいたままの医師が静かに顔を上げた。その瞳の奥には、言葉にはできない懇願の色が淡く浮かんでいた。

看護師はその後頭部に指を滑り込ませ、髪をそっと梳くように、繰り返しやさしく撫でた。

やがて、撫でていた指先に静かな力がこもり、そのまま医師の顔を持ち上げるようにして、自分を見上げさせた。

「……続ける。」

医師はひとつ、目を閉じた。そして跪いた姿勢のまま、ベッドの縁へと静かに膝を進めていった。

口元がちょうど相手の股間の高さに届いたところで、医師は顔をわずかに傾け、濃紺のナース服の裾を掻き分けると、

ズボンの縁を唇でくわえ、ためらいなく引き下ろした。

現れたのは、内側からむせかえるように膨らんだ下着——医師はそのまま顔を寄せ、鼻先のすぐ下に、熱を帯びた男根の形がはっきりと浮かび上がっていた。

口先で下着をずらしたその瞬間、抑えきれぬ衝動のまま、硬く膨らんだ陰茎が弾けるように飛び出した。反射的に顔を背けようとした医師の髪を、看護師の手が容赦なくつかみ、そのまま下腹部へと押しつけた。

「……んっ」

唇と舌が包み込んだ瞬間、看護師は小さく息を吐いた。そのまま視線を落とし、跪いた医師の閉じた脚を見つけると、足先でその間に割り込み、つま先で無言の命令を与えた。

「……躰は、どうした？」

医師はビクリと体を震わせ、喉がひとつ鳴った。そのまま両手を背後に組み、男根を咥えたまま、命令に応えるように脚をゆっくりと開いてみせた。

一片の無駄もない肢体。中途半端に勃ち上がった男根。整ったがどこか硬質な顔立ちは、元来の禁欲さを漂わせてい

た。——にもかかわらず、今その顔には、甘く蕩けた色気が滲んでいた。

白衣は肩から無造作に掛けられたまま、その裾は床を引きずりながら——医師が奉仕を続けるたび、静かに、けれど確かに前後に揺れていた。

時間は静かに、けれど確実に過ぎていった。昼休みはとづくに終わり、待合には次々と予約患者が集まり始めている。そのざわめきは扉越しに、ここ診察室の奥にも微かに届いていた。

本来なら診察にあたっているはずの張医師は——今、診察室の奥で男の肉棒を口に咥え、必死に奉仕を続けていた。だが、外から漏れ聞こえる患者の声に、わずかに心が揺らいだ。

「……何を考えてた？」つま先でその露わな陰茎をつつきながら、看護師は低く言った。「そんな雑な舌で、どうするつもりだ？」

張医師は一瞬で気持ちを切り替え、咥えた肉塊を今まで以上に強く吸い上げた。——今度こそ、失望させないように。「どうした？」足の指先で、まだ不完全に昂ぶった陰茎をくすぐるように弄びながら、看護師は笑みすら浮かべて言った。「ちゃんとやれないなら……他の仕事なんて、全部後回しでいいだろ？」

(……もう、勘弁してくれ——)

心の中で弱音を吐きながらも、口の動きだけは止めることができなかった。ただひたすら、口の中で膨らむそれが一刻も早く果ててくれることを願うばかりだった。

五分が過ぎても、啞えているそれはさらに硬さを増していくばかり。——射精の気配など、どこにもなかった。診察室の外では、待ちくたびれた患者たちの声が徐々に高まっていた。

——その音が、耳に刺さるようだった。

何度も口を動かし、舌を這わせ、喉奥まで受け入れて。

——それでも果てぬ現実には、張医師は絶望を滲ませた目で看護師を見上げた。整ったその瞳には、薄い涙の膜が静かに浮かんでいた。

「……もう無理か？」看護師は医師の頬に触れ、顎を持ち上げてその目を覗き込む。「手を貸してやってもいい。でも……その代償、わかってるよな？」

医師は一度、静かに目を閉じた。——そして再び開いたその瞳には、ためらいのない従順の色が宿っていた。

奉仕の動きがぴたりと止まったのを察し、看護師はゆっくりと、その唇の奥から己の熱を引き抜いた。

「……お願い、します……」ようやく解放された唇が、震える声でそう紡いだ。「……続き、手伝ってください……」

看護師は冷ややかに彼を一瞥し、何も言わずにベッドから降りると、その背後へと静かに回り込んだ。

うなじのあたりに、生ぬるく湿った感触が押し付けられた。

——それが濡れた亀頭であることを、医師は瞬時に察した。

「……こっち、向いて。」

命じられるがまま、医師は背筋をまつすぐに保ったまま、膝立ちの姿勢でゆっくりと男の方へ向き直った。

その動きひとつにさえ、従順さが滲んでいた。

看護師は医師の顎を指でそっとつまみ、そのまま後ろへと押しやった。医師の頭は、診察ベッドの縁にぴたりと押し

当てられ、動けなくなる。

「……口、開けて。」

医師は何も言わず、ただ静かに口を開けた。そして、ごく自然に唇を使って、自らの歯を丁寧に包み込んだ。

「——ほんと、手間のかかる奴だな。」

短く愚痴をこぼしたあと、看護師は腰を前へと突き出し、医師の口奥へと容赦なく自らを沈めていった。

そして、唇の奥深くまで肉棒を繰り返し突き入れながら、激しい律動でその喉奥を打ち鳴らす――。



## 第2章 「我慢しろ」

「BOT 番の患者様、4 番診察室へお入りください。」

廊下にあナウンスが響いた瞬間、さきほど無断で診察室に入り込み注意を受けた女性患者が、ぱっと立ち上がり、4 番診察室のドアの前まで歩み寄り、そのまま扉を開けて中へ入っていった。

診察室に入った途端、診療デスクの上に置かれた透明なクリスタル製の名札が目に入った。そこには「市医科大学 附属病院・生殖医療センター 副医師長・張承彦（チョウ・ショウゲン）」と記されていた。

張承彦医師は診療デスクの奥に端然と腰掛け、白衣の下に着たシャツは皺ひとつなく整えられ、第一ボタンまできちんと留められていた。

彼の隣では、濃紺のナース服を身にまとった男性アシスタントが、手元のカルテを確認しながら、パソコン上で患者の電子ファイルを呼び出していた。

「張先生、今日はずいぶんお忙しいようですね。」

張承彦医師の専門外来は非常に人気が高く、患者は午前中に長時間並んでようやく午後の最初の診察番号を取ったものの、診察室の前でさらに三十分も待たされた。そのせいか、彼に声をかけたときには、どこか不満げな口調になっていた。

医師はどこか後ろめたそうに曖昧な相槌を打った。すると隣のアシスタントが患者を横目に見ながら、冷たい口調で尋ねた。「診察番号BOTの方ですか？」

患者は小さくうなずいた。先ほどの無表情な男性アシスタントの厳しさを感じていたため、下手に逆らう気にはなれなかった。

「座ってください。」男性アシスタントは無愛想に診察机の前の椅子を指さした。その命令めいた口調に、患者はすぐに反応し、医師の正面にそっと腰を下ろした。

静まり返った診察室にプリンターの駆動音が響き渡る。数秒後、男性アシスタントは印刷された検査結果を手際よくまとめ、カルテと共に医師のもとへ差し出した。

「PCOSの周期的治療についてですが……今お使いの薬で、体調に何か気になる点はありませんか？」

「張先生、最近夜よく眠れなくて……頭が痛んだり、息苦しくなったり、胸が圧迫される感じがしたり……それに胸が張って痛くなることもあって……」

ただの定期再診のはずだったが、医師に尋ねられたことで、女性患者はまるで堰を切ったように次々と体調の不調を訴え出した。

張承彦は表情を変えることなく、ほんの少しだけ眉をひそめた。薬の副作用に関する質問は形式的なものに過ぎず、睡眠障害などは自分の処方と関係ないと分かっていた。だが、こうして訴えの多い患者を前にすれば、本当に問題がないか慎重に見極めるしかない。

「一つずつ整理していきましょう。」張医師は辛抱強く言いながら、状況を丁寧に把握しようとした。「それらの症状は、お薬を服用してからどのくらいの時間で出ましたか？」

「うーん、はっきりとは分からないんです……その日のうちに出ることもあれば、翌日だったり、三日経っても五日経ってもつらい時もある……」

患者の絶え間ない訴えが次第に遠くで鳴る雑音のように感じられ、張承彦は内心で頭を抱えなくなっていた。ふと視線を逸らしてコンピューターの前のアシスタントを見ると、その男の目が意味ありげに、自分の胸元をじろじろと眺めているのが見えた。

その視線に焼けるような感覚を覚えた張医師は、反射的に白衣の前をきゅつと引き寄せて締め直した。

「そこまでお体の不調があるようでしたら、今周期の治療は一旦お休みして、全身検査を受けてみてはいかがでしょう。他の原因が隠れている可能性もありますから。」張医師はわずかに体をそらし、アシスタントの視線を避けるようにして患者の目を見据えた。「症状が重い場合は、入院での精密検査を考える必要があるかもしれません。どう思われますか？」

張医師の提案に一瞬戸惑った表情を見せた患者だったが、すぐに「そこまで深刻ではないかもしれませんが」と言い添え、この周期の治療は続けたいと希望を伝えた。

軽くうなずきながらカルテにペンを走らせ、処方する薬剤名と注射薬の種類・用量を口にし、それを男性アシスタントがPCに打ち込んでいった。

「超音波検査をもう一件、追加でお願いします。」張医師は冷静な口調を保ちながらも、視線だけはアシスタントのほうを避けて続いていた。

プリンターの作動ランプが静かに点灯し、薬名と分量が記載された処方箋が出力された。それを取り出したアシスタントが医師に手渡す瞬間、ふとした拍子に二人の指先が触れ合った。

思わず手を引っ込めた張医師は、視線を落とし、何事もなかったかのように処方箋に署名を記した。

「次回の再診では超音波検査を受けていただきます。検査の依頼書はもう出しておりますので、来週は直接カードで受付して検査を受けたあと、こちらに戻ってきてください。」

いくつかの注意点を丁寧に説明したところで、ようやく多くを語っていた患者も満足した様子で診察を終えた。

患者が診察室を出た後、男性アシスタントはまるで何事もなかったかのように気だるげに口を開いた。「次、呼びます?」

「……ああ。」張医師は小さくうなずいた。

アシスタントは呼び出しボタンに手を伸ばしかけたが、その寸前で動きを変え、指先をゆっくりと張医師の脚の間へと滑り込ませた。

薄く硬さを帯びた指先が、張り詰めた陰茎にそっと触れた瞬間、張医師は抑えきれず小さく声を漏らした。

アシスタントは、くつと笑った。

「……そんなに欲しかったか？」デスクの下で、既に勃起した陰茎をゆるく撫でながら、アシスタントは嘲るように言った。「あんな喋り倒すババでも反応するなんてな。」

午前の診察が始まる前に行われたプレイの終わり、張医師はアシスタントの精液を一滴残さず飲み干し、うがいを済ませたあと、放たれたばかりの陰茎を丁寧な舌で拭うように舐めて綺麗にした。

身だしなみを整えて診察デスクに座った張医師に対し、アシスタントは無言のままスラックスのジッパーを下ろし、中からまだ半勃ちの陰茎を掴んで引き出した。

こうして、身なりは端正そのものの張医師は、陰茎を露出させたまま診察デスクに座り、最初の患者の診療を終えた――半勃ちだったそれは、いつの間にか硬さを増し、完全にそそり立っていた。

アシスタントの問いに、張医師は言葉を失ったまま、ただ沈黙で応じるしかなかった。

「さあ、言ってみろ。何を考えてた？なんでこんなに勃ってるんだ？」アシスタントは張医師の陰茎を弄んだまま、声に力を込めて問い詰めた。

張医師は静かに目を伏せた。「さつき……処方箋を受け取ったとき、先生の手に触れて……それで……」

「ふうん……」アシスタントは鈴口を指でなぞり、滲み出た透明な粘液をつまみ取った。

「それと……その前に……先生が……僕の胸元を見てたから……」

「見るだけでこんなに勃つのか？」アシスタントは呆れたように言い捨てた。「まったく……すぐ発情して、もうこんなに垂らして……」

そう呟きながら、アシスタントは先ほど亀頭を弄った指先を、無言のまま張医師の唇元へと差し出した。

張医師の唇がそつと近づくと、アシスタントは指を折り曲げ、口元をコツンと小さく叩いた。

「口に入れるな。舌を出して。」

張医師は命じられるままにわずかに身を引き、ゆっくりと舌を伸ばして、アシスタントの指先に残った粘液を余さず舐め取った。

デスクの上に置かれた消毒用ジェルのボトルを手にとったアシスタントは、少量を掌に取り、数秒間両手を擦り合わせてから、呼び出しボタンを押した。

「B08 番の患者様、4 番診察室へお入りください。」

廊下にまた心地よい女性の声が響き、張医師にも次の指示が与えられた。

「我慢しろ。」



### 第3章 「つけて、待っている」

時計の針が午後五時を指す頃、最後の患者は張承彦に軽く礼を言い、処方箋を手にして診察室を後にした。

患者の姿が見えなくなったのを確認すると、男性看護師はカルテのシステムをシャットダウンし、席を立てて入口まで歩き、診察室の扉をびたりと閉めた。

「まだ、やるべきことは残ってる？」と男性看護師が穏やかに医師に尋ねた。

医師は静かに首を横に振った。

「こっちに来なさい。」

医師はデスクから静かに立ち上がり、従順な足取りで彼の前へと進んだ。

午後の診察中ずっと、助手に下半身を時折刺激され続けたせいで、医師の身体はもはや一切の戯れにも耐えられないほど火照っていた。

男性看護師は掌を医師の股間に当て、軽く数回揉んだ後、露出していたものをズボンの中へ収め、ファスナーをしつ

かりと閉めた。

「十五分後、いつもの場所で待て。」それだけ言い残し、男性看護師は一度も振り返らずに診察室を後にした。

※

「張先生、お疲れ様です。お帰りですか？」警備員は車で入ってきた彼に声をかけ、すぐに駐車場のバーを上げた。車内の張承彦は無言で軽くうなずくと、アクセルを踏み込み、そのまま走り去った。

市でも有数の大病院で最年少の副主任医師となった張承彦。その地位は、優れた学歴や卓越した医療技術に加え、市の医療界に根を張る彼の家系の影響力もまた、出世を後押しした。

広々としたこの病院では、彼に憧れを抱く女医や看護師たちがいる一方で、陰では絶えず嫉妬や中傷の声もあった。ただ、彼を疎ましく思う者たちも、その背後にある強大な家系を恐れ、誰一人として正面から衝突しようとはしなかった。取り入ろうとする者も、陰で妬む者も、何を言おうが関係ない。順風満帆な張承彦は、常に冷ややかな性質で、人と無駄に言葉を交わすことはなかった。

十五分後、張承彦は黒いSUVを走らせ、病院の近くにある人目につきにくい路地へと入り込んだ。

路地の角で慣れた手つきで車を方向転換させた張承彦は、そのまま車を降りて助手席側へ回り、ドアを開けて中に乗り込んだ。

シートに腰を下ろした瞬間、ポケットの中の携帯が二度震えた。彼はすぐに取り出し、画面に表示された新着メッセージを確認した。

「グローブボックスの鈴をつけて、俺が来るまで待っている。」

携帯を置いた張承彦は、グローブボックスを開けた。中を探すまでもなく、鈴はすでに彼の目の前にあった。

——それは、鈴のついた銀製のペニスリングだった。

ペニスリングの幅は指二本分ほどで、表面にはレトロな彫刻模様が施されていた。サイズ自体は決して大きくない。

リングを手にとってしばらく見つめ、それをシートの上にそっと置くと、腰元に手を伸ばしてベルトのバックルに指をかけた。

まずスラックスを脱ぎ、それから下着、靴下、革靴と順に身に着けていたものを外していく……これまでの関係からして、彼はあのメッセージが何を意味しているのかを理解していた。

間もなく下半身の衣類はすべて脱ぎ終わり、それらを丁寧に畳んで後部座席に置いた。前を向き直したとき、彼の手にはペニスリングがあり、姿勢を整えて座り直した。

手の中のリングをそつと揺らすと、鈴が涼やかな音を鳴らした。それを身につけた自分の姿を想像し、張医師はふと頬を赤らめた。

精巧な二つの半円で構成された銀のリングを両手でそつと開いた張承彦は、座席の上でゆっくりと脚を開き、一方の手で自らの陰茎を支え、もう一方の手でそのリングを根元に装着した。

「カチッ」と小さな音を立ててリングがぴたりと閉じ、レトロな模様が一つの形として再び繋がった。

時間が一秒一秒と過ぎていく。人気のない路地に停められた車の助手席で静かに座り、落ち着いた様子で待ち続けた。  
いた。

車の窓はすべてスモークフィルムで覆われており、たとえ誰かが近くを通っても、車内の様子まではうかがえなかつ

た。

彼が体を少し動かすたびに、静かな車内には鈴の澄んだ音が小さく響いた。その音は、今この体が誰のものであるのかを、身につけた本人に静かに知らせていた。

ドアが静かに開く音とともに、密閉された車内にひやりとした風がすべり込んできた。

——運転席に乗り込んできたのは、あの男性看護師だった。

「ご主人様。」張承彦は運転席の方へ体を少し傾け、挨拶を口にした瞬間、鈴の音がそれに重なるように鳴った。

男性看護師はちらと彼に視線を向けただけで、何も言わずにエンジンをかけ、車をゆっくりと路地から走らせた。

数分後、車は交差点の赤信号で静かに停車した。

「手を後ろに回して、脚を開け。」

言われた通りに両手を後ろに回し、そつと周囲の様子を窺った。フロントガラス越しに外から見えないことを確かめてから、ゆっくりと脚を開き、陰茎の根元に嵌められた美しい銀のリングをさらけ出した。

左手をハンドルに添えたまま、男性看護師は前方を見据えたまま、無表情で右手を伸ばし、彼の陰茎の根元を撫でた。その部位はすでに永久脱毛が済んでおり、手に触れた感触は滑らかで整っていた。そこには、あるべきでないものは何ひとつ存在しなかった。

「チリン、チリン。」

指先は陰茎の根元から鈴をなぞりながら滑り、やがて先端へと移っていった。避けようもなく、粘性のある分泌がその指に付着した。

男性看護師はわずかに眉をひそめた。

「リングをつけたままで、それでも発情してるのか？」

張承彦は顔をそむけた——リングをつけていれば硬くならないけれど、欲しくなれば濡れるのは当然だ。

男性看護師は手を引つ込めると、そのまま張医師のスーツで汚された指先を拭い取った。

「忠告しとく。いやらしいことばかり考えるな。……降りる時にシートが濡れてたら、その椅子、全部舐めてもらう

からな。」

張承彦は黙ってうなずいた。そのわずかな動きに反応するように、鈴の音がまた静かに響いた。

退勤ラッシュで道路は混雑していた。信号が青に変わった後、男性看護師はそれ以上何も言わず、運転に集中していた。

助手席の医師は主人から新たな指示を受けることなく、両手を後ろに回し、脚を大きく開いたままの姿勢を保っていた。

車窓の外では空が徐々に暗くなり、道路の車たちは次々とヘッドライトを灯していた。対向車線から時おりハイビームの車が近づいてくるたび、その眩しさとともに、心中には強い羞恥の感覚が込み上げてきた。

ついにSUVは混雑した市街地を抜け、郊外へと続く道路に入った。

車内には終始沈黙が流れていた。走行が中盤に差しかった頃、張承彦は車が自宅とは別の方向へ進んでいることに気づいた。

彼は運転に集中している主人の横顔をそっと伺ったが、一言も発さない様子に、行き先を尋ねることはできなかった。

車はしばらく走り続けた後、やがて灰色の建物の入口前で静かに止まった。

その古典的な西洋建築を認識した瞬間、張承彦は不安と怯えの混じった目で主人を見つめた。

「そんなに驚くことか？」男性看護師は彼の股間についての鈴を指先でつまみ、軽く揺らしながら言った。

「ここ、お前が昔よく通ってた場所じゃないか。」

医師は視線を逸らし、黙ったままだった。

男性看護師は指で彼の頬を押さえ、顔を自分の方へ向けさせ、無理やり目を合わせさせた。

「ここはどこだ、教えろ。」

「ここは……クラブです」張承彦は小さな声で答えた。少しの沈黙の後、彼はためらいがちに言葉を継いだ。「それに……」

「私とご主人様が認め合った場所です。」